

## 翻訳

## ジョルダノ・ブルーノ

## 『しるしのしるし』第1部第1節～第23節

岡本源太訳

【訳者解題】 以下に訳出したのは、ジョルダノ・ブルーノ『しるしのしるし』（ロンドン、1583年）から、第1部第1節から第23節までである。底本には、Giordano Bruno, *Sigillus sigillorum*, in *Opere mnemotecnice*, II, a cura di Marco Matteoli, Rita Sturlese, Nicoletta Tirinnanzi, Milano, Adelphi, 2009. を使用した。また、訳出には同書掲載のイタリア語訳と注釈も参考にした。

ルネサンスのヨーロッパを代表する哲学者ジョルダノ・ブルーノ（Giordano Bruno, 1548-1600）は、1583年から1585年にかけてイギリスに滞在し、彼の前半期——といってもブルーノの全著作の執筆期間は十年ほどしかないが——の主著たる「イタリア語対話編ロンドン六部作」を出版する（『聖灰日の晩餐』『原因・原理・一者について』『無限・宇宙・諸世界について』『傲れる野獣の追放』『天馬のカバラ』『英雄的狂気』）。本書『しるしのしるし』は、その六部作に先だってブルーノがイギリスで上梓した著書であり、『三十のしるしの解明』に附されて刊行された。基本的にはブルーノのいわゆる記憶術論に分類される著作だ。とはいえその内容は、記憶術の基礎にある存在論的および認識論的構造を解説するもののため、簡潔にまとまったブルーノ哲学入門という趣がある。とりわけ第1部の第1節から第23節までは、ブルーノの考える世界と認識の構造が総体として描き出されており、ここに訳出した次第である。第1部第24節以降、および第2部の翻訳の公表については、他日を期したい。

一読してすぐ知れるように、ブルーノの描く世界の構造はおもにプラトン主義（ないし新プラトン主義）に、認識の構造はアリストテレス主義に依拠している。ブルーノによれば、世界は三層の構造をもち、神々の領域（「形而上学的なもの」「イデア」等と呼ばれる）・自然の領域（「自然学的なもの」「痕跡」等と呼ばれる）・人間の領域（「理性的なもの」「影」等と呼ばれる）の三つのあいだで発出と還帰の運動が生じている。また、その最後の人間の領域たる認識は、おおむね四層に分けられる構造をもち、感覚・想像力・思考・記憶（あるいは感覚・想像力・理性・知性）という順に形相が抽出されて認識が進展するという。

これだけを確認するといかにもルネサンス哲学らしい折衷的な体系だと言ってしまいたくなる。しかし看過すべきでないのは、ブルーノがその独自の哲学構想

にもとづいて、プラトン主義ともアリストテレス主義とも異なるところに力点を移動していることだ。すなわち、ブルーノにとって重要なのは、これらの諸々の階層のあいだにたえまない交通があることなのだ。ブルーノは、アイデアの世界への上昇をかくべつ重視してはいないし、感覚から知性へと抽象化されるほど認識が完成されるとも語っていない。それどころか、その逆行運動も同時に生じていることを重ねて主張する。諸々の階層のあいだで相互に移動と変換と翻訳が起こり、世界と認識とを貫いて全体として循環する流れがあることを、ブルーノは強調するのである。「流転 (vicissitudo)」という概念に集約されるこの循環運動こそ、ブルーノが「無限」「一者」という語とともに語ろうとする存在全体の構造にはかならない。

したがってブルーノによれば、人間の「技術＝学芸 (ars)」が効力を発揮するのは、こうした諸々の領域のあいだの交通に人為的に介入することによってである。たとえば記憶術は、最初の感覚や想像力の段階にはたらきかけて、最後の記憶の段階に影響を与える。さらに言えば、認識の階層は、実体的に区別される固定的な位階構造をもつわけではない。万物は実体としては一つであり、そのはたらきにおいて多様であるとするブルーノ哲学から見ると、感覚・想像力・思考・記憶は、四つの別個の能力ではなく、一つの同じ能力がそのつど異なるはたらきによって異なる名称を受け取っているだけだ。これらの名称は学派しだいに入れ替わるし、区分そのものも観点に応じて増減する。そのように実体においては一つにはかならないからこそ、たえまない交通と循環が起こり、技術＝学芸による介入の余地も生じるのである。

ブルーノが、その独自の哲学構想にもかかわらず、自身の著作ではプラトン主義とアリストテレス主義の用語を折衷的にもちいつづけたのは、さらにはかくも多種多様な比喩と寓話に訴えつづけたのは、名称は恣意的なものにすぎないがゆえに、慣習的に共有された言語をもちいるのが人々に理解される最善の道だと考えたからだろう。ここには、言語と概念はけっして一致することがないという、ルネサンスの人文主義（ヒューマニズム）の根源にある哲学的洞察を、ブルーノもまた受け継いでいたことが見て取れる。以下を読まれるにあたっては、その使い古されたと言ってもいい折衷的で比喩的な言い回しを通してブルーノがいかに新しい思想を語ろうとしていたのか、注意されたい。

ノラの人、フィロテオ・ジョルダノ・ブルーノによる  
心のすべての整えられるべき情態と  
完成されるべき習慣に適した  
しるしのしるし

第一部

1. いまだかつて卑しい才知のもとに安らったことなどない神的な霊はわたしに、なかんずくこう悟らせてくれた——事物それ自体へと心底から焦がれているものの、ためらってもいるおまえは、第一に、おまえを外から奮い立たせ内から駆り立てているそのものを、もっとも近い主神として祀り、君主として頌え、神格として呼び、光として向きあうようにせねばならない。
2. そうしておまえは、人間のすべての技術には三つのものがなければならないことを憶えておくのだ。第一のものにおいては、個々のものが生み出されるまえに知恵深く考え出される。第二のものにおいては、それら個々のものが機を逃さず敏速に成し遂げられる。第三のものにおいては、考え出され引き出されたそれら個々のものが、維持され、勇敢に守られることになる。
3. そこから古代人は、アテナ、ヘパイストス、アレスの三柱の神がすべての技術を統率すると語り伝えているのである<sup>1</sup>。これが制作に関わる神格たちの三位一体であり、つねに事物の至高の構築者たるゼウスのかたわらに在る。そしてその三位一体全体がゼウスにしたがうように、ヘパイストスとアレスはアテナにしたがっている。
4. 神的な技術においてその三つのものを支配しているこれら三柱の神格の痕跡が、同様に自然のなかにもあるということを、わたしたちは見いだせるだろう<sup>2</sup>。アテナの痕跡は、事物が配置される秩序である。ヘパイストスの痕跡は、

---

1 プラトン『法律』(920D-922A)では、共同体の生活を整える職人たちの守護神としてアテナとヘパイストスが、共同体の生活を守る軍人たちの守護神としてアテナとアレスが挙げられ、これら生産と軍事の二つの技術の実践は、共同体の守護神たるゼウスとアテナを敬うことにほかならないとされている。ブルーノの論述は基本的に、これを解釈したマルシリオ・フィチーノ『「法律」注釈』にもとづいている。Marsilio Ficino, “In De legibus Epitome,” in *Opera omnia*, II, Basileae [Basel], 1576; repr. Torino, Bottega d’Erasmus, 1962, p. 1521.

2 ここでブルーノは、人間の技術と神々の技術にひきつづいて、自然のはたらき(技術)にも類似の構造を見ている。そのように神々の領域、自然の領域、人間の領域の三つのあいだに類似の構造があるというのは、ブルーノ哲学の基本的な世界観である。ただしこの三つの領域は、ブルーノにあっては、フィチーノにおけるような序列関係ではなく、位階としてよりもむしろ併行する三つの位相と捉えた方が正確である。

出生への迅速な進展、いわばよどみない素速さである。アレスの痕跡は、生む者たちから生まれた者たちに伝えられる構造である。

5. かくして個々のものもまた、第一には永続する源泉から流れ出て、第二には生まれて、第三には、自身の起源にさかのぼるとき、その同じ源泉へと流れ戻る。第一に出来し、第二に成熟し、第三に完成されるのだ。そこからオルペウスは、同じものを始原にして中間でもあり終極と呼んだ。
6. おまえは確実に、必要に駆られて、このものへと呼びかけ目指すことを余儀なくされるだろう。その必要性によって、岐路に立たされた人間は、ゼウスの望むままに——よく言われるように——曙の翼を欲してそれを手中にする。ゼウスは、人間たちの才知が無気力にならないように、またその才知の生き生きとした力が失われないように、欠乏を与え、困難なものごとによって脅かすようにしたのである<sup>3</sup>。
7. プロメテウスが神々によく思われていなかったことを、おまえは憶えておくように。というのもプロメテウスは神々の宝をばらまいて、人類を無気力へと追いやってしまったと思われるからだ。もしくは、プロメテウスはきわめて貴重なものを、相応しい者も相応しくない者も区別せずに共有物にしてしまったからである。
8. したがって、おまえと少数の者だけが、救いをもたらすおまえのネクタルの飲料を味わうようにするのだ。そうすることでおまえは、昏睡をもたらすレーテーの川の水をすっかり清めて、まずはたやすく天の神々とともに天の生をおくり、ついで天を超えた神々とともに天を超えた回転をたどるにいたる。そこから、呆然とした大勢の民衆と一緒にじっとしているカルネアデス、キネアス、メトロドロスがそれ以上の高みに行けないままにいるのを、眼にできるだろう<sup>4</sup>。

3 『傲れる野獣の追放』の第二対話第三部から第三対話第一部にかけてで詳論されているように、ブルーノは一貫して労苦を懲過し、無為を否定する。Giordano Bruno, *Spaccio de la bestia trionfante. Œuvres complètes*, V, Paris, Les Belles Lettres, 1999, pp. 327-367. [ジョルダナーノ・ブルーノ『傲れる野獣の追放』(著作集第五巻)加藤守通訳、東信堂、2013年、153～205頁。]ここにはプロテスタント批判はじめ重要な哲学的含意があるが、詳細については以下の拙著を参照のこと。岡本源太『ジョルダナーノ・ブルーノの哲学——生の多様性へ』、月曜社、2012年、第四章。

4 プラトン『パイドロス』(246E-248C)では、翼のそろった完全な魂がゼウスに率いられた神々や神霊とともに経験する「天の生」と「天を超えた回転」について語られている。そのように真理へと上昇する翼ある魂をもつ哲学者に対して、群衆とともに憶見と慣習にとらわれたままの懐疑論者がカルネアデスとメトロドロスによって暗示され、また同じく真理に到達できない術学者(修辞家)がキネアスによって暗示されていると考えられる。

9. 万物のこのうえない無知と愚鈍をもたらすピュタゴラスの時間——実際、この時間を通してすべてのものは忘却によって掻き消されてしまう——に同意するとしても、おまえはシモニデスの時間にも反対しないように。その時間のおかげで、すべてのものが探究され、理解され、発明されるのであり、消え去ったものがふたたび燃え上がり、断ち切られたものがふたたび芽吹くのだ<sup>5</sup>。
10. 自然はありとあらゆるものに適性に応じて選り抜きの翼を分け与えた。けれども、その翼を広げることを知って風を切り羽ばたくにいたる者は、まったくもってごく少数である。その風は、切ろうとするなら抵抗するように思えるが、羽ばたくなら飛ぶのを支え助けてくれる。実際、おまえが努めて風を切って打ち揺らせば、恩知らずではないその同じ風がおまえの前進を支えてくれる<sup>6</sup>。
11. 事物、記号、イメージ、映像、想念がわたしたちのまえに置かれている。それらには違いがある。醜く悪いものは嫌らしいし、美しく善いものは望ましい。またそれらが二つや三つ合わさっているものでも、善いものは愛らしく、醜いものは憎らしい。同様に、抽象された知性的なものと一緒に過不足なく感覚できるものは、把握しやすい。それに対して把握しにくいのは、感覚できなさすぎたり感覚できすぎたりするもの、およびその本性からして——つまり抽象することをせずとも——最大限に知性的なものである。
12. こうしたものの媒介によって自然は、感覚、情欲、知性、意志を飾りたてる。そこから生じるのが、見ること、触れること一般、想像すること、考えること、一次記憶をすること、推論すること、知解することである。ここからは、二次記憶——獲得され習慣になった知性と呼ばれるのがつねだが——が生まれてくる。また、これらに付け加えられるのが涵養するものであり、

---

懐疑論と学術的修辭への批判は、ブルーノの著作の随所に見られる。

- 5 ピュタゴラスは輪廻転生を主張したところから、時間の負の側面たる忘却と消滅を語った者として、ここで言及されている。逆にシモニデスは、記憶術の発明者として、時間の正の側面たる生成と発展を示した者として言及されている。こうした時間と流転の両極性は、ブルーノ哲学にとって根本的なものであり、たとえば『英雄的狂気』で詳しく論じられている。Giordano Bruno, *De gli eroici furori. (Œuvres complètes, VII, Paris, Les Belles Lettres, 1999; 2e éd., 2008, pp. 41-51. [ジョルダノ・ブルーノ『英雄的狂気』(著作集第七巻)加藤守通訳、東信堂、2006年、19～24頁。]*
- 6 ここに見られるような、障碍であるものが同時に道具にもなりうるという発想は、ブルーノの理解する意味での「相反の一致」の教説から帰結するものである。ブルーノにおける「相反の一致」については、以下の拙著も参照のこと。岡本源太、前掲書、第四章。



信念一般、困惑、躊躇、良心、自信、魅了一般（これは歓喜、野心、好奇心、自信を呼び起こす）、なにかしらの疲弊（憎悪、恐怖、畏怖を掻き立てる）といった種がある。こうしたものすべてが、一方では好意や忌避を、他方では同意や異議を生み出すのだ。

13. これらが第一単純概念ないし把握である。数えること、計ること、量ること、分割すること、配分すること、区別すること、整序すること、定義すること、命題にすること、論証すること、知解すること、これは第二単純概念にして——こう言ってよければ——考察である<sup>7</sup>。
14. 以上のものをこうしてわたしたちは整理し、おまえはそれを理解すべきにように理解したのだから、以下のことも心して吟味しなければならない。すなわち、自然から生じるもの——わたしたちは容易にその観想者になることができるのだが——のアイデアは最初、第一の制作者の精神のうちに先在しているのだ。そのアイデアを範例にして、類であるところの普遍の数々と、それらの類に属する諸々の種が生み出される。ついで、そうした類と種のもとに、不滅性によって完全なスペキエスを見せている個体や、もしくは、流動する質料のなかで継起と分配によって継続し、秩序にしたがって多数化される個体が、光のもとにあらわれでてくる。これらこそが、第一の精神から最初に知性へと伝えられる。そして、はかりしれない仕方で原型のなかに先在していたあと、知性を通して自然のなかに出てくる数々のものは、あたかもある縁を囲むようにして生じて、自然本性的に存続する。
15. このとき、まるでなにか扉を通るかのように、感覚を通して、形而上学的なものから自然学的なものが発せられ、自然学的なものから理性的なものが生じる。理性的なものは、人間の内的感覚によって吟味されなければならない、人間の内的感覚においてより非質料的な能力に入り込み、永続することになる。
16. このように、アイデアの源泉たる最高次の世界（そこに神がいると言われ、それは神のうちにあると言われるところの）から、アイデアにかたどられた世界（神によって、神からつくられたと言われるところの）への下降があり、

7 トマス・アキナス『命題論』註解の冒頭では、アリストテレス『魂について』第三卷第六章（430a-b）が念頭に置かれつつ、知性のほたらきが二つ（その後もう一つ追加されて最終的には三つになるが）に区別されており、ここでのブルーノの「把握」と「考察」の区別におおむね対応している。Thomas Aquinas, "In libros Peri Hermeneias expositio," in *Opera omnia*, I, iussu impensaque Leonis XIII P. M. edita, Romae [Roma], Ex Typographia Polyglotta, 1882, p. 7. [トマス・アキナス「命題論註解」山本耕平訳、『中世思想原典集成』第一四巻、平凡社、1993年、257頁。]

そして、そのアイデアにかたどられた世界から、先立つ二つの世界双方の観想であるところの世界への下降があるのだ。この第三の世界は、第一の世界から第二の世界を通して存在するのであり、同様に、第一の世界を第二の世界を通して認識する。したがって、循環によって、第一の世界から第三の世界への分散と、第三の世界から第一の世界への復帰とが起こるのだ。あるいは——こう言いたければ——反省によって、第一の世界から第三の世界への下降と、第三の世界から第一の世界への上昇とが、その中間を通して起こるのである。

17. もしおまえが二つの自然本性のおこなう制作の双方に適合するなら、おまえの制作はまさしく驚異のものとなるだろう。けれども逆に、もしおまえが愚かに惑うなら、死の影と呼ばれているこのうえない混乱の霧に覆われてしまうだろう。かくして、記憶と知性によっておまえは、三つの世界の仕組みと繋がりを、そこに含まれている諸々のものと一緒に、孕んで産むことができる。おまえはそれを驚異の母胎にして子宮から取り上げて、宵の明星からであれ日の出からであれ、真夜中からだろうと真昼からだろうと、差し込んでくる光のもとに連れ出し、そのあと急いで抱きしめるだろう<sup>8</sup>。
18. それから、言い忘れるべきでないものがまだある。諸感覚とその器官、能力、作用は、いわば唯一の中心へと自然本性的に戻っていき、そこからつづく想像力の広間を形相でもって飾るのであり、それら形相は思考の食堂を通して、記憶の寝室に進んでいく<sup>9</sup>。同様に、望みのままに思い出したいと欲する者は、同じ順序で道をたどるのがいいだろう。実際、そのために、千回も見聞きしたもののでもその仕方が悪ければおまえから逃れてしまうが、同じ感覚を一回だけ偶然にかすめたもののでも、それら形相が永遠に残りつづけるなら、記憶の奥深くを占拠するのだ。それら形相はまさに想像力によっ

8 概念や理解を意味する「conceptio」には妊娠の意味もあり、これによってブルーノは人間の認識行為の創造性を強調していることに注意したい。なお、ここでの出産にまつわる文彩は、『旧約聖書』「ヨブ記」第三章におけるヨブの文言を踏まえ、それを逆転したものと思われる。

9 感覚・想像力・思考・記憶という順に形相が抽象化されていくとは、アラビア経由でヨーロッパに受容されたアリストテレス主義の認識論にもとづいている。イブン・シーナー『魂について』木下雄介訳、知泉書館、2012年、等を参照のこと。とはいえ、ブルーノがこのとき重視するのは、抽象化されるほど認識が進展することではなく、これら諸々の能力のあいだで変換と交通がなされることであり、これが世界の三つの位相のあいだの交通と循環に連続したものとして、ブルーノの存在論と認識論の基礎をかたちづくっている。

て飲み込まれ、思考によって消化されるが、しかし無視されたものは戸口に投げ捨てられ、胡椒なしに押し込まれたものも無駄になるのである。

19. だから、ソクラテスが忘却をある種の無感覚と呼んだのも、ゆえなきことではない<sup>10</sup>。とはいえ、もしソクラテスが同じ理由で同様に無感覚のことを、蒔かれたが記憶に根づかなかった記憶されうるものの種子と呼んだとしたら、まちがいなくいっそう深遠なものを説明したことになっていただろう。
20. したがって、想像力がより力強く感覚的スペキエスによって叩かなければ、思考は開かないし、扉たる思考が開かないなら、ムーサたちの母親も憤慨して、それら感覚的スペキエスを迎え入れない。
21. そのため、感情を動かすもの——これには推論、思考、強い想像力がともなうが——が、記憶を揺さぶるようにするのだ。そうした感情を揺り動かすものによって、わたしたちは熱望し、軽蔑し、愛し、憎み、嘆き、よろこび、驚き、感覚の天秤にかけ、そうして熱望の、軽蔑の、愛の、憎しみの、嘆きの、よろこびの、驚きの、検討のスペキエスと一緒に、憶えるべきものの形相から触発されるのである。さらに強く烈しいものほど、結果として、いっそう強く烈しく刻印することになる。
22. しかしまた、もしおまえの自然本性が、ないし理解すべき事物の自然本性が感情を引き起こさなかったとしても、工夫によって感情を掻き立てるようにするのだ。実際、感情の鍛錬は、最上の品性にも最低の品性にも道を開くばかりではない。それどころか、すべてのものを——人間に可能なきぎりで——知解し、それぞれの力に応じて活動することへの道も開くのだ。ここから確証されるのが、欲求と怒情がはっきりしている人々のほうがより活動的だということである。おまえは、それらの人々のなかでもとりわけ烈しく憎み愛する者たちを、なににもまして不敬虔な者たちとして、あるいは——もしその人々が神的な愛と熱望によって駆り立てられるところへと向きなおるなら——なににもまして敬虔な者たちとして認めるだろう。そのときおまえは、同じ質料原理が最良の徳と悪徳とに同時に隣り合っていることを見抜くだろう<sup>11</sup>。

10 プラトン『ピレボス』(33E-34A)への言及である。ブルーノが「無感覚」に代えて「種子」という語を使うべきと主張する点には、認識過程をより動的なものと捉えるブルーノ哲学の特徴が出ているだろう。

11 一つの同じものが正負の両面をもつとは、ブルーノの理解する「相反の一致」の教説であり、感情もまたそれにもとづいて徳と悪徳の両方の原理とされる。ブルーノがここで欲求(libido)と怒情(ira)を語っているのは、欲求(情欲)・怒情(気概)・理性、というプラトンの魂の三分説(『パイドロス』246A-D、『国家』434E-441C, 580D-581C)をもと



23. 古代人は、すべての感情、関心、効果の親たる愛——これは先ほど述べられた原因によって双子なのであるが——を大いなる神霊と呼んだ<sup>12</sup>。もし愛を自分にうまく引き寄せるなら、まちがいなく、おまえにはなんの困難もなくなる。以上、必要に応じてわたしたちは、どうすればおまえが技術によって、ものごとの記憶のみならず、普遍的な人間の知恵と真理にも到達できるのかを説明した。

---

にしてのことと考えられるが、欲求と努情を理性によって抑制すべきとは主張していないことに注意したい。むしろブルーノは、理性ではなく、感情の激しさこそが悪徳と同時に徳をもたらすとする。これがブルーノの感情論の特異さをかたちづけていることについては、以下の拙著を参照のこと。岡本源太、前掲書、第一章・第二章。

- 12 ブルーノが愛を「偉大なる神霊」と呼ぶのはもちろんプラトン『饗宴』第八章（202D13）に依拠してのことであり、愛は双子であるとの主張も同じくプラトンにもとづく（『饗宴』第三章 180C-181C）。フィチーノによる『「饗宴」注釈』の影響も看過できない。Marsilio Ficino, *Commentarium in Convivium Platonis. De amore*, Paris, Les Belles Lettres, 2002. [マルシーリオ・フィチーノ『恋の形而上学』左近司祥子訳、国文社、1985年。] とはいえ、上述のように、ブルーノは愛の両面性を「相反の一致」の教説にもとづいて理解していることに注意せねばならない。